

第三百二十五回 青葉会

平成二十五年四月二十五日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか 中野一灯

〈投句〉

福島正明 山崎亜也 山内天牛 伊賀山そらお 石川清 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 南平和夫 宮内規雄

〈紙上選句〉

赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 星田啓子 村田くに子 山崎青史 山本三恵

《選者吟》

初花や老樹を囲む藁(ひこばえ)に  
雲行きの北へ加速し花吹雪  
鴉らと子らの輪唱「春が来た」  
満開の御苑のつつじ赤朱紅(あかしゅべじ)  
和子てふ旧友多し昭和の日  
万里子 (灯・隆)  
全 (恭)  
全 (恭)

《互選句》

八点

☆ 遠雷や軍鶏の蹴爪(けつめ)を研ぐ漢  
(青:軍鶏と漢のたくましさを見事に活写)  
一灯 (万・敏・允・啓・く・亜・青・三)

六点

草餅を指紋もろとも食ひ終る  
久々に常連揃ふ句座暮春  
恵洲 (猛・恭・忠・正・青・三)

四点

夜桜や十歳若い妻に会ふ  
卯の花やキスするやうに水を飲む  
紀久男 (忠・五・弘・允)

☆ 八重桜江島の出でし不浄門  
(青:桜の夜らしい艶なるストーリー。「会ふ」↓「逢ふ」の方が情緒纏綿)  
弘子 (万・五・灯・天)

(☆上五↓八重桜(やえ) 咲くやor葉桜や)

卵の花やキスするやうに水を飲む  
堂哉 (万・恭・忠・隆)

☆ 未熟児と生まれて来しが入学す  
(☆中七↓して生まれしが)

(☆中七↓して生まれしが)

☆ 春風や富士立つ海へ漕ぎ出でぬ  
昇 (万・堅・敏・灯)

☆ 待ちわびる春の日替り介護食  
和夫 (万・恭・忠・く)

初蝶のそこはかとなき風の舞  
盛雄 (堅・猛・龍・灯)

三点

御苑にてつつじに溺れ寂を知る  
忠彦 (龍・ゆ・啓)

焼きホタテ津軽の遅き花見かな  
一灯 (敏・龍・天)

雪形の白馬や田ごとの耕耘機  
正明 (猛・ゆ・く)

葉桜や薦(こも)を被つた手漕ぎ井戸  
全 (弘・ゆ・隆)

☆ 異次元の金融緩和ぞ亀も鳴く  
亜也 (万・正・三)

春遅し神田の名店カレーの香  
全 (五・ゆ・天)

☆ 晩節は土と向き合ひトマト植う  
盛雄 (万・敏・ゆ)

二点

ゆらゆらと球追ふ子等に雪柳  
清 (弘・ゆ)

追悼・團十郎

四半世紀共演舞台朧なり  
紀久男 (恭・正)

襟替(えりがこ)に「お気張りやす」と花の昼  
全 (堅・龍)

桜愛(め)で微醺を帯びて終日(ひもすがら)  
猛 (龍・正)

花曇り検査入院三日終ふ  
恭延 (紀・隆)

☆ 春惜しむ海鞘(ほし) だす女将の田酒かな  
忠彦 (龍・啓)

☆ 紅殻(べにがら)の村に降る雨春深む  
五郎太 (万・天)

花の雨米寿祝ひの夜は更く  
全 (允・く)

二の丸に雅楽流るる春の夕  
青葉風靴をおろして歩を速む  
☆雅楽の音絶えて閉門花は実に  
☆初鶯猫八よりも下手に啼く

柴又にて

☆草だんご一串を手を手にそぞろ行く  
初つばめ竿いっばいの濯ぎもの  
初鯉トラフのことは気にせず  
風光る小さき雀鷓(つみ)が鴉逐ふ

(雀鷓とは小型の雌鷹。井ノ頭公園にて)

一点  
初蝶は平川濠に身を映す  
くふくふと眠気をさそふ墓の声  
隣人に留守を頼んで春の旅  
尾道は猫が導き寺巡り

(↓春旅や猫の導く寺巡り)

新開場成田屋居らぬ花の冷  
春深し木木は色濃くなりけり  
暮れ泥(なづ)む春山濡らす冷雨かな  
四島に残りて咲くや蝦夷山桜(えぞざくら)  
閑谷(しづたに)の時はなほ行く山躑躅  
手に残る塗香(つかき)の香り出開帳  
春暁や正夢なりし大き地震

この門不浄門と聞きしかば

生きて出る平川門やうららけし  
篤姫も眺めし庭につつじ見る

ピサの斜塔(鐘楼)にて

三百段昇れば七鐘春の風  
緑生(む)う皇居の崖や花筏  
散る花も江戸の風情や幹太し  
初虹や起重機の吊るコンテナー  
花びらをマークにすればワンパット  
歌舞伎座の柿落しや春爛漫  
パレードの春多士多彩の歌舞伎かな  
ショパン聞けば我も優しやスイートピー  
亡妻の綽名は敦ちやんスイートピー  
徂徠學繼ぎし藩校孔子祭  
山椒に雌雄あるとか新芽摘む  
料亭の亭主にばつたり花の下  
実直な本屋の主人四月かな  
郁子(む)満開身重な姪の長話  
弥生尽古式顔寄せ手打式

五郎太 (敏・允)  
全 (猛・亜)  
弘子 (万・亜)  
恵洲 (万・忠)

ゆたか (万・く)  
一灯 (啓・青)  
正明 (紀・五)  
亜也 (紀・弘)

天牛 (忠・三)  
全 (亜・三)  
そらお (隆)

全 (紀)  
紀久男 (啓)  
猛 (堅)  
全 (堅)  
忠彦 (堅)  
五郎太 (紀)  
弘子 (啓)  
健介 (紀)

恵洲 (允)  
ゆたか (隆)

全 (隆)  
全 (五)  
全 (敏)  
一灯 (允)  
正明 (灯)  
昇 (く)  
和夫 (紀)  
規雄 (天)  
全 (弘)  
亜也 (弘)  
全 (青)  
天牛 (隆)  
全 (青)  
全 (青)  
全 (紀)

●次回青葉会

五月二十三日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

年会費を集めます

六月二十七日(木)  
七月二十五日(木)

平成二十五年四月句会報

一 句会当日、午后四時平川門に先生以下10名集合。天牛さんの快気祝と称して久しぶりの東御苑躑躅観賞会を催しました。快晴に恵まれ、ガラ空きの苑内満開の緋つつじ、牡丹等を堪能。句を手に書きとめる人が多かつたんですが、花より何んとかの人も居られました。五時丁度、別の会合に出られる恵洲さんと別れ丸紅へ。

句会は12名出席、投句9名。未だ酒を控えておられる天牛さんの快気を祝してビールで乾杯！天牛さんから小川軒（目黒）のレイズン・ウイツチ、先生から手造りのチヂミ、弘子さんから起き上がり最中（金沢の浦田甘陽堂）と飛驒の蔵出し原酒「山車」（岐阜の原田酒造）、五郎太さんから純米大吟醸「白菊」（岡山県高梁市）、忠彦さんから弘前の桜餅「薄合せ」（開運堂）と純米吟吟醸「一の蔵」（宮城）と盛りだくさんの寄贈。どんどん平らげて追加。

清記された句の回覧段階でのセルフ・チェックについて注意喚起（前回、孤舟さんの八点句と一点句で誤記したものを選句）。選句に入る前に天牛さんへ快気祝：萬年堂本店（銀座）の「お芽出糖」（高麗糖）を贈呈。（偶然ですが、窓際に胡蝶蘭が飾られてありました）。入院中の和夫さん、精密検査される恭延さん、清さん等、療養中の会員が増加傾向にあります。高齢化しつつある為、已むを得ませんが、天牛さんのように回復され会に復帰されますようお願いしております。

国会議員の靖国参拝、柿落し、日銀の金融緩和そして小松義人さんの絵等を話題にしつつ終了。句会の出来として今回は低調という声もありましたこと付記します。

二 関係者近詠

心奥へ遺影の視線霜の夜

万里子

枯木立人をしづかに歩ましむ

孤舟

語り継ぐ追慕や通夜の月凍つる

全

星屑の降つてきさうな西の市

全

雨音のいつか消えゆき春の雪

全

ポインセチアわがたましひに色あらば

全

積りつつ雫をつづる春の雪

全

巖頭の羚羊星と交信す

全

献体へ柩見送り冴返る

眞希子

縄張りのうぐす既にナルシスト

全

老梅の神社裏手に民家の背

全

「爽樹」五月号

全

御櫃飯海苔に納豆腐腐汁

弘子

櫻若葉大樹に人は一寸法師

天牛

豆撒きや手から手へ飛ぶ豆袋

全

天辺に大きな古巣風渡る

允章

うつすらとデコイの疲れ二月尽

全

金蘭や風透き通る雑木林

全

残雪の庭跳ね回る番鳥

恭延

人生のこの期に及び花粉症

青史

春暖炉手離せさうなこの日差し

全

春の星幽く残る通夜の朝

堂哉

休酒解く二輪に見える梅一輪

忠彦

花や良し双児の母の笑顔また

全

鴈風呂を伝への浜に育ちけり

全

春風に押されて登る七百段

そらお

追悼 團十郎

紀久男

春の宵湖面を焼きて日の沈む

全

梅匂ふ檜舞台に別れかな

全

春の宵湖面を焼きて日の沈む

全

「萬緑」五月号

規雄

（宍道湖）

全

春の水身重の妻の手をとりて

岩岡中正選

緋つつじや友の快気に猛り燃ゆ

紀久男

「NHK俳句」五月号

恵洲

友快気ビール呷つていざ句座へ

全

新調のゴム長嬉し雪解道

西村和子選

團十郎由縁の助六花は葉に

丹野敦雄

「NHK俳句」五月号

全

花ひらりスケッチブツクに舞おりる

小松義人

飲み仲間又一人欠き花見かな

全

三 新聞・俳誌より目に付いた句

● 「春の雪君失せたるは野か海か」 文挾夫佐恵（ふばきみ ぶさえ）

● 「兵なりき死ありき星辰（せいしん）移り秋」 全

― 最高齢99歳で蛇笏賞受賞

代表句は「炎天の一片の紙人間（ひと）の上に」 全

五月十四日

紀久男記